UR PRESS

UR都市機構の情報誌［ユーアールプレス］

2014
vol.36

［特集］
長寿社会を共に生きる

［巻頭インタビュー］
綾戸智恵
自分らしい介護で絆を深める

UR
UR都市機構の情報誌［ユーアールプレス］
PRESS
2014
vol. 36

CONTENTS

1 長寿社会を共に生きる

3 ［巻頭インタビュー］
綾戸智恵さん
自分らしい介護で絆を深める

7 CASE 1〈館ヶ丘団地〉
団地タクシーが運ぶ
高齢者の笑顔

11 CASE 2〈けやき台団地〉
居住者の善意をつないで
支え合いの仕組みをつくる

15 URの取り組み
Part 1　大谷田一丁目団地
生活支援アドバイザーが
地方公共団体と連携して見守りを実施

Part 2　奈良北団地
安心して住み続けるための
住まいとサービスを提供する

Part 3　豊四季台団地
生きがいのために働いて
無理なく、楽しく、地域に貢献

19 復興の最前線〈岩手県釜石市〉
地域の団結力で早期の再生を実現
「3年目の正月は自宅で」の願いに応える

21 クロスワードパズル&プレゼント

22 URからのお知らせ
近所に住む家族間で生活を
サポートし合える仕組み

UR営業センターに
「高齢者相談窓口」を開設

表紙は「町田山崎団地」（写真：望月 仁）

季刊「ユーアールプレス」
vol.36（2014年 2月）

発行　独立行政法人都市再生機構
〒231-8315
神奈川県横浜市中区本町 6-50-1
横浜アイランドタワー
Tel. 045-650-0892 / Fax.045-650-0889

編集・制作　I&S BBDO
デザイン　ボールドグラフィック
印刷　大日本印刷

1-2ページの写真：「館ヶ丘団地」と「けやき台団地」＝田中 昌、「大谷田一丁目団地」＝中村 晃

長寿社会を共に生きる

ここで紹介するのは高齢者対策ではない。若者から壮年、高齢者まで、すべての世代の住民が、お互いにそれぞれの知恵と力を寄せ合い、支え合う姿である。高齢者にとって住みやすいまちは、誰にとっても住みやすいまちになる。そこには、理想を理想に終わらせない、住民同士の不断の努力がある。

巻頭インタビューは、約10年にわたり母親の介護と向き合いながら、連日のステージをパワフルにこなす歌手の綾戸智恵さんに、家族の介護と、住みやすいまちの在り方について聞いた。

大谷田一丁目団地（東京・足立区）
高齢者を見守る生活支援アドバイザー
高齢者の仲間づくり、健康づくりにも一役

けやき台団地（東京・立川市）
イベントで“顔が見える関係”づくり
お互いを見守り、気遣う機運が醸成

館ヶ丘団地（東京・八王子市）
起伏に富んだ敷地を快走！
団地タクシーが高齢者の外出を支援

［巻頭インタビュー］

自分らしい介護で、親との絆を深める

綾戸智恵

interview with Chie Ayado

パワフルなステージを繰り広げる一方で、約10年間、認知症の母親の介護を続けてきた歌手の綾戸智恵さん。何ごとにも全力で向き合う性格から、一時は疲れ切って、自身を追い込んでしまうこともあったのだとか。しかし、そうした経験も糧にしながら、「自分なりに母親の介護と向き合う術を工夫してきた」と語る綾戸さんが、10年間を振り返った。

写真＝吉澤咲子　取材・文＝宇治有美子

あやど ちえ

ジャズシンガー。ニューヨークでゴスペルクワイヤーのメンバーとして活動した後に帰国。大阪のジャズクラブなどで歌い始め、1998年、40歳でプロデビュー。幅広い選曲を織り交ぜたパワフルなステージと笑いあふれるトークで、ジャズファンのみならず、多くの老若男女に感動を与えている。

2004年に発症した脳梗塞、そしてその後の不慮の事故による転倒をきっかけにして認知症を発症し始めた実母の介護を、1人で続けてきた綾戸智恵さん。

2008年には、一時表舞台から姿を消し、介護に専念しようと決断。しかし、その翌年、「娘として、自分の人生を全うすることこそが親孝行だ」と悟り、活動を再開した。

人生の悲哀や憤り、出会いや別れ……。綾戸さんが歩んできた壮絶な人生がにじみ出る魂の叫びのような歌声は、多くの人々を魅了し続けている。

音楽活動と並行して母親の介護と向き合って10年――。今、綾戸さんは、介護に悩む人々に「子どもの負担になるのを喜ぶ親はいない。だから1人で抱え込まないで」と語り掛ける。

失敗を重ね、自分なりの介護の工夫が生まれてくる

――綾戸さんは10年間介護を続けられてますが、長く前向きに介護を続ける秘訣があれば、教えていただけますか？

綾戸　ずっと早くやめたいと思ってきたから、前向きになんて考えたことないんです。ああしよう、こうしようと計画したこともないしね。親も自分も生ものやから、思った通りになんていかないのが介護。親の認知度や仕事の時間帯、それからもともと持っている親の性格……。それぞれの家の数だけ、必要となる介護も違うと思う。そやけど、その自分の境遇の中で、みんな日々学んでいくもんですよ。

――失敗することで、工夫する心が芽生えてくるものだと？

綾戸　そうそう。例えば、トイレには手すりがあるから転ばないと思っていたら、ある日手の力が足りなくてバランスを崩してしまうことがあった。では、どうしたらけがせえへんかと考えて、ゆっくりと手すりを伝って歩く練習をしましたよ。

母と2人でよく温泉に行くんですけど、体重30kgの私が、60kgの母親を担いでお風呂に入れるのは難しい。そしたら、浴槽のふちに一旦座らせてから、少しずつお湯に入れたらいいなって。そのとき、タオルを下に敷けば、肌がすれない。人は、日々学んでいくものです。工夫やアイデアをどんどん試してみるんですよ。

――時には、人の助けも上手に借りられるそうですね。

綾戸　それも、工夫の一つやわ。去年、母の米寿のお祝いをしたんですけど、2人でよく行くおすし屋さんやおそば屋さんが駆けつけてくれたんですよ。

そのおすし屋さんは、母と行くと食べやすいように1貫の分量で2貫分のおすしを握ってくれる。おそば屋さんは、そばをすすられんようになった母のために、そば団子を作ってくれる。きちんとお願いしたら配慮をしてくれるもんです。

まち中でも、例えばバスから車いすの母を降ろすときに、見ず知らずの人にも声掛けますよ。「お兄ちゃん、手伝って！」って。もちろん、手伝ってもらったら「お兄ちゃん、男前やな、ありがとう！」と感謝の言葉は忘れずに掛けます。そんな言葉のマジックで、やってあげたいって気持ちにさせるのも、生きていく術でしょ。

近隣の人々にも、協力を求めながら介護を続けてきたという綾戸さん。それだけに、お年寄りや若者が共存するまちづくりが必要だと感じているという。

お年寄りと若者が互いの切り札を交換し合うまちが理想

――今現在、介護を続けておられる綾戸さんにとって、お年寄りが住みやすいまちづくりのために何が必要だと思われますか？

綾戸　私、「老人用」とか「介護者用」とか〝題目〟が嫌いでね。老人ばかりが住むまちにも、希望を感じられへん。お年寄りが住む家の向かいに若者が住んでいて、お互いの様子が分かる。そんなさまざまな世代の人が共生しているのが理想のまちやと思うねん。

それは何も、若い人たちに、おじいさんやおばあさんを大事にせえって言ってるんやないよ。忘れてはいけないのは、お年寄りは60歳で生まれてきたわけではないということ。お年寄りにも自分

たちと同じ年齢の時があったと考えれば、おのずと若者はもっとお年寄りと話せるはずやし、頼れるはずやと思う。

「戦争の話聞かせて」でも、「昭和レトロのちゃぶ台かっこいいから見せて」でもいい。きっかけなんて、何でもええんです。その代わりに、お年寄りからトイレ行かせてくれって頼まれたら、サポートする。

もちろんバリアフリーも大切やと思いますよ。でも、バリアフリーがあるから放っとけばいいというのではあかん。若者には若者の、お年寄りにはお年寄りの強みがあるから、互いの得意技を交換しながら暮らせるのが、本来のええまちなんやと思います。

——綾戸さんは、お年寄りが住みやすくなるような人付き合いが、お上手なのだとか？

綾戸　面白い話があってね。私たちの家から坂道を下ったところに、母と時々行くレストランがあるんです。ある日、その坂を、車いすを一生懸命押しながら上っていた帰り道に、傘を忘れたことに気付いた。「この坂また往復するんか」と頭を抱えていたら、ふと郵便局が目に入ったんです。郵便局の人に事情を話して、3分だけ母を見てもらえませんかってお願いした。レストランに舞い戻ってから郵便局の人にお礼を言ったら「こんなことぐらい」って言ってくれはったんです。

またある時自宅で、私がどうしてもトイレに行きたくなったことがありました。マンション内で普段からよく話をする方にお願いして、10分だけ母を見てもらった。介護をしていると1分だって目が離せないですから、この10分はありがたかったです。私はその後、その時母を見てくれた人の結婚式に行って歌を歌いましたよ。お互いの得意技の出し合いです。

人に助けてもらおうと思ったら、待っているだけではあかん。

子どもの頃、何のために口が付いてるのかと親に言われましたけど、手伝ってほしいなら、口も足も想像力も総動員して頼まなあかん。そんで、頼まれた側もうれしくなるように声を掛ける。

そんな持ちつ持たれつの気持ちや心の触れ合いが、お年寄りにとっても若者にとっても暮らしやすいまちづくりの第一歩やないかと思いますね。

快活に介護について語る綾戸さんだが、「何ごともできると思って突っ走ってしまう性分」から、3年前には介護疲れで倒れてしまったことも。その失敗を生かして「頑張らなくていい」と自らに言い聞かせながら、母親の介護に向き合ってきた。

お年寄りと若者が互いの強みを
持ち寄り、助け合い、共存する。
そんなまちづくりが大切やと思います。

写真：池田エイシュン

できなくなったら手を離してもいい

——倒れたことを教訓にして、「できることだけをやる」と心掛けているそうですね。

綾戸　そう。できないことをやろうとしたから私は倒れたんや。母に「私はあんたよりも偉いと思って、なんとかしたろうと思った。あんたよりも後に死ななあかんのに、先に死にそうになったわ。これから先、もうあんなアホな失敗しません。娘やからって許して」って謝りましたよ。そしたら「そんなときは甘えたらええねん。病院に入れたらよかったのに……」と言ってくれました。

親の介護で一番大事なのは、〝この人を私が守っている〟ので〝いまだに自分は守られはなく、〝いま自分は守られている存在だ〟と理解することや と思う。親は私が生まれた時から私のことを知ってるけど、私は母の33歳のときからしか知らん。あっちの方が歴史が長いねん。自分の方が、歩いたり話ができるとか、もうけられるとか、そんなんは氷山の一角でしかない。親を超すなんて一生無理なんです。

子どもが幸せになることを一番に願っている。そんなに愛情のある人が、私を懲らしめるはずがない。無理して子どもに心や体を壊される方が親はずっとつらいんやから、できなかったら、しなくても親は許してくれます。いつ手を離してもいい。そやけど、もう1日だけ見させてっていう気持ちで続けていたら、知らんうちに10年がたってた。それが、10年間介護を経験してきた私の答えでもあるんです。

親子ならではの関係で無理せず、できる範囲で

——自分なりの方法を見つけて続けることが大切なのですね。

綾戸　まさに、それですわ。自分が抱えなければとか、自分だけが頑張ればと思ったらあきません。周囲の力添えを借りながら、〝自分だからできること〟をしたらいいのではないでしょうか。

私の母は、今、自我が完全になくなる前の状態。だから、自分はこの子の親なんやとたまには思い出してもらおうと思っているんです。時々ね、「デイサービスではご飯を自分で食べって言われるねん」と不平そうに言う母に、じゃあ食べさせたろうかって言うと、すごく喜ぶんです。あとはね、母が好きな百貨店で一緒に買い物したり、青果市場をぶらっとのぞいたり……。「見てみい。スイカが出てるわ。夏やな！」と会話を交わすとか、そんなささいなことしかできひん。でも、母が「楽しかった」という感想文が書けるような毎日をつくることは、介護士や看護師にはできひんでしょ。親と子には、親子しか知らない見えない糸があると思う。その武器を使うことが私にしかできひん介護なんやと思います。

——今後直面するだろう介護に不安を感じておられる方に、何かメッセージをいただけますか。

綾戸　今現在、直面してないんやったら、考えんでよろしい。それよりも、自分の質を上げることを考えなあかん。しっかりと立ち、歩いて、親から頼られても折れへんような自分をつくるのが、今できることやと思います。

団地タクシーは視界の広い前席に2人の乗客が座ることが可能。走りながらこぎ手と会話を楽しんだり、道行く知り合いに声を掛けたりすることができる

館ヶ丘団地は、自然に恵まれた住環境を誇るが、起伏のある広い敷地内の移動は、高齢者にとって難題だ

小回りが利く団地タクシーは、団地内の狭い通路もスムーズに走れる（右）。敷地内にはかなりのアップダウンがあるので外出をためらう高齢者もいるが、団地タクシーなら行きも帰りも楽々（左）

東京・八王子市の高尾山は、都心からのアクセスが良く、年間約250万人もの登山客が訪れる。ミシュランが作成した日本観光ガイドでも、世界遺産の富士山と並び、2007年から連続して三つ星を獲得し、多くの外国人も登山を楽しんでいる。

高尾山から東へ約1・5㎞、JR中央線高尾駅からバスで約10分の場所にある館ヶ丘団地は、自然に包まれた生活環境を誇る。総戸数は2847戸で敷地面積は東京ドーム約6個分の29ha。豊かな木々や起伏に富んだ地形がさまざまな表情を作り出し、自然公園の中にいるような雰囲気だ。

2013年5月から、そんな団地の小道を、かわいらしい箱形の乗り物が走り抜ける姿が頻繁に見られるようになった。前部の座席に乗る高齢者とすれ違う住民が、「こんにちは、お元気ですか！」と明るくあいさつを交わしている。

かわいらしい乗り物の正体は、3輪自転車を使った「団地タクシー」。団地内の移動に苦労する高齢者のために自治会が運営している。自宅と団地入り口のバス停や団地内の商店街などへの往復に、一日20人くらいが利用している。

その様子をじっくり見るとびっくりすることが。大きな車体の後部でペダルを颯爽（さっそう）とこいでいるのも高齢者だ。かなりの上り坂でも、にこやかに運転している。

こぎ手の苗村昭子（なえむらあきこ）さんは72歳。「運転者のボランティア募集の告知を見たのがきっかけ。困っている高齢者は元気な高齢者が支えないと。地域との関わりを持てば自分の張り合いにもなりますから。運動のつもりでやっています。電動アシスト付きなので、見た目よりずっと楽ですよ」と話す。

前の座席の利用者は78歳。ほぼ毎日、利用している。「団地内のスーパーで買い物をした後、荷物を持って帰り道の坂を上るのがつらくて。団地タクシーのおかげでとても楽になりました」

団地にピッタリの乗り物

「館ヶ丘団地では住民の高齢化が進み、現時点で65歳以上の住民が約43％を占めています。そうした高齢者が、毎日の買い物に困っていたり、引きこもりになってい

団地の敷地をゆっくりと走る団地タクシー。車体は大きいが電動アシスト付きなので、高齢者でも会話しながら運転できる

CASE 1

館ヶ丘団地（たてがおか）
（東京・八王子市）

老いも若きも運転手に

団地タクシーが運ぶ高齢者の笑顔

東京・八王子市の館ヶ丘（たてがおか）団地に2013年5月、3人乗りの自転車で高齢者を送迎する「団地タクシー」が走り始めた。外出に苦労する高齢者のために自治会で運営している。団地に住む元気な高齢者と、地域の若者がボランティアとしてこぎ手を務める。団地タクシーが走り回ることで、地域に笑顔が生まれ、支え合いの絆が強くなっている。

写真＝田中 昌
取材・文＝横田直子

乗客と会話を交わしながら、団地タクシーを運転する今泉さん。高齢者の生活状況の把握にも生かしている

自治会副会長
西田田鶴子さん

「八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘」室長
今泉靖徳さん

自治会事務局長
柿崎泰秀さん

法政大学多摩キャンパスに通う
松本詩織さん

団地タクシーの運行範囲は団地の敷地内。入り口付近にある整骨院への通院（上）やスーパーマーケットへの買い物（下）などさまざまな用途に使われている

たりするケースが増えています。なんとか自主的に外に出てもらう方法はないか、自治会で常に話し合っていました」と自治会副会長の西田田鶴子（にしだたづこ）さんは振り返る。

しかし、広く起伏に富んだ館ヶ丘団地は、高齢者にとっては敷地内を歩くのさえ大変なことがある。そんな問題意識を共有して解決に力を尽くしたのが、団地で東京都の見守り事業を進める「八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘」室長の今泉靖徳（いまいずみやすのり）さんだ。

今泉さんが目を付けたのは「ベロタクシー」。「ベロタクシー」とは、ドイツで実用化された自転車を利用したタクシーのこと。「自動車通行を制限した団地内にピッタリだと思いました」。このアイデアを受けて、東京都の補助金を利用して自治会で導入することを決めた。

「ベロタクシー」は高齢者用に設計されているわけではないので、より使いやすいオリジナル車両を自転車メーカーに発注した。そうして出来上がったのが乗り降りしやすく、前方視界が広い電動アシスト付き3輪車の「団地タクシー」だ。現在、月曜から金曜までの週5日、10時から15時まで、2台を使い無料で運行している。走行範囲は団地敷地内なので、1往復は10～20分だ。

こぎ手はボランティアで、70歳代もいる。「老々介護みたいなものかもしれませんけど、みんなけっこう楽しくやっています」と話す自治会事務局長の柿崎泰秀（かきざきやすひで）さん（70）も、自らペダルをこいでいる。

若い力のサポートも

こうした高齢のこぎ手をサポートする助っ人が、近隣にある大学の学生たち。その一人、法政大学に通う松本詩織（まつもとしおり）さんはこぎ手を始めて3カ月になる。「キャンパスにあるボランティアセンターでこぎ手の募集を知りました。面白そうなボランティアだと思って応募しました」

当初は高齢者とのコミュニケーションに不安もあったという松本さん。しかし、団地タクシーは乗客とこぎ手だけの個室のようなもの。自然と乗客との距離は縮まっていった。

「ガムやアメをいただくのはしょっちゅうですし、『松本さん、お願いね』と指名してくれる常連さんもできました」。利用者にとって松本さんは孫世代。「私も団地におじいちゃんやおばあちゃんがたくさんできたように感じて、楽しくこいでいます」。

団地タクシーは高齢者の足代わりになるだけでなく、見守りにも力を発揮している。利用に当たっては、同意を得た上で名前や年齢などの情報を登録してもらい、乗客の情報収集に活用。

また、毎週決まった曜日に利用する乗客に「いつもどこに行くんですか？」と尋ねると、「整骨院ですよ」という答え。この会話だけで生活状況が把握できる。

さらに車内で「ほかに調子が悪いところは？」「何か不便なことは？」といった会話を交わして、見守り活動を充実させている。

「団地タクシーの利用をきっかけに、これまで自治会や相談室と交流がなかった高齢者が、健康面や生活面の悩みについて相談を持ち掛けてくれるようになりました」（今泉さん）。そうした結果、「以前はある程度の頻度で発生していた高齢者の孤独死も、団地タクシーの導入後は、ほぼなくなっています」（西田副会長）。

地域の住民で支え合う

さらに導入の効果について、西田副会長は、「今まで足元だけを見て歩いていた高齢者が、団地タクシーの気配に顔を上げて、乗客やこぎ手の高齢者とあいさつを交わすようになりました」と話す。

移動の苦労が軽減した乗客の高齢者には、周囲を眺め、知り合いとあいさつし、会話する余裕が生まれた。そして、こぎ手の若者と触れ合い、元気を分け合っている。また、こぎ手の高齢者は、人の役に立つ喜びによって生きがいが持てるようになった。

今泉さんは、「団地タクシーは、団地全体で高齢者サポートを強化していることのシンボル的な存在です。団地タクシーを通して、地域のみんなで支え合って暮らしていく大切さに住民が気付いてきたと思います」と話した。

「八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘」の前が団地タクシーの拠点。登録者からの要請を受けて、ここから出発する（上）。団地タクシーは前2輪、後ろ1輪の3輪車で、荷物置きも備えている（右下）。運転方法は基本的に自転車と同じ、変速機も備えている（左下）

電動アシスト用のバッテリーの充電は団地入り口のバス待合所の屋上に設置された太陽光発電パネルの電力で行う（上の2枚の写真）。こぎ手のサドルの下にあるバッテリーを外して充電しておく（下の2枚の写真）

自治会副会長・自主防災協議会会長の中澤映子さん

居住者の善意をつないで支え合いの仕組みをつくる

東京・立川市にある、けやき台団地。築46年、5階建て30棟に、約1250世帯が暮らす。居住者の約半数は60歳以上。居住者はお互い顔を合わせると声を掛け合う。その表情は一様に明るい。ここでは、世代を超えた「顔の見える近所付き合い」がさまざまな取り組みによって実践され、地域の絆を深めている。

●★以外の写真＝田中 昌　取材・文＝船木麻里

きっかけは3年前の東日本大震災だった。「これまでの防災意識とは明らかに違う、居住者の方々の心の変化を感じました」と、けやき台団地で自治会の副会長と団地居住者で構成する自主防災協議会の会長を務める中澤映子（なかざわえいこ）さん（64）は言う。

「支えあいマップ」を作成

震災後に開いた住民集会では、出席した高齢者から不安の声が次々と上がった。1人の高齢男性が「年寄りは孤独で寂しいんだ！」と叫んだ姿を、中澤さんは今でも鮮明に覚えている。

けやき台団地の居住者の約半数は高齢者。一人暮らしの世帯も少なくない。頼るべき近親者が近くにいない高齢者にとって、突然発生する災害は大きな脅威だ。

「高齢者を孤独にしてはいけない」と、中澤さんがまず実施したのが、アンケートによる居住実態調査。いざという時、居住者全員の安全を確保するためには、「団地内の要援護者と支援者の所在を正確に把握しておくことが欠かせない」（中澤さん）と考えたからだ。それまでにも、要援護者・支援者について調査はしていたものの、リストにはすでに亡くなっていたり、引っ越したりした人の名前が残っていた。

アンケートの回答には、家族全員の名前や生年月日のほか、人によっては、質問にはない、自身の体調や残りの人生への思いなどが記されていた。少し震えた字で、しかし丁寧に書き込まれている回答を見て、中澤さんは涙ぐみながら集計作業を続けた。

「私はここにいます、忘れないでください、と訴えかけられているようでした」（中澤さん）

集計されたデータはいざという時に使いやすいよう、棟ごとの要援護者と支援者、そして自治会や自主防災協議会の役員などの所在がひと目で分かる「支えあいマップ」としてまとめ上げ、防災委員に配布した。

顔が見える関係づくり

マップを作成して安心したのもつかの間、1人の防災委員が発したひと言に中澤さんは、ハッとする。それは、「このマップは持っているだけでいいのですか？」という素朴な問い掛けだった。

「マップが有効に機能するためには、居住者同士が日ごろからお互いに顔の見える関係をつくっておく必要がある」。そう考えた中澤さんは、居住者が気軽に参加できるようなイベントの開催を思い付く。イベントを通じて居住者同士が定期的に顔を合わす機会を増やしていけば、おのずと顔なじみは増えていく。

中澤さんの呼び掛けに、自治会の役員と住民有志が応じた。この時、中澤さんが心掛けたのは、できるだけ多くの人を巻き込むこと。マップ作りでは、内容がプライバシーに及ぶため、作業のほとんど全てを1人で抱え込んでしまった。しかし、1人でできることには限界がある。世話役になってくれそうな人に声を掛けるとともに、高齢で体の不自由な人には「居てくれるだけでいいの」と参加を呼び掛けた。

「団地は人材の宝庫。それぞれが自分のできる範囲で、その持ち味を生かしてくれればいいのです」と中澤さん。その柔らかなスタンスは多くの人を引き寄せ、知り合いが知り合いを呼ぶかたちで、輪はあっという間に広がった。

最初に開いたイベントである「歌の会」のスタッフは、9人のうち5人が要援護者だった。自然と、お互いに「無理をさせない、思いやるのが当然」という雰囲気が生まれた。「誰もが気軽に参加できるイベント」であるための環境が、こうして整った。

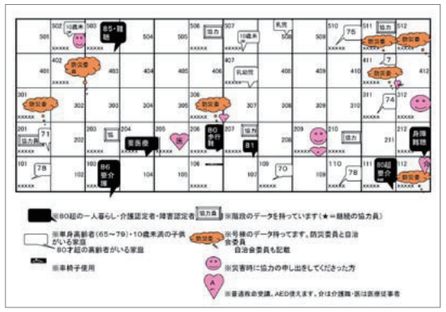
毎日開かれるイベント

今、けやき台団地では毎日のように、さまざまなイベントが開かれている。その数毎月30以上、参加者は延べ1000人に及ぶ。「いきいき健康体操」、「歌声広場」、「ものづくり&ティータイム」、「いい年のとり方セミナー」、「ダンササイズ」など、さまざまなメニューが用意されている。幅広い世代にも参加してもらおうと、若い母親向けに「ベビーマッサージ&ママビクス教室」、夏休みには子ども向けに、お絵描きなどを楽しむ「子ども広場」も開く。

とりわけ盛況なのが「健康麻雀」だ。集会所の一室で、麻雀卓を

真剣な表情で体操に取り組む参加者

「いきいき健康体操」は、1時間掛けて、じっくりと体をほぐす



東日本大震災をきっかけに作成した「支えあいマップ」。要援護者と支援者が団地のどこにいるかがひと目で分かる（表はイメージ）

「健康麻雀」はリハビリ効果もある。実際にメンバーの1人は、病気で不自由になった手指が、麻雀をすることで回復した

近藤富美江さん

仲間とのおしゃべりが楽しい「ものづくり&ティータイム」。若いお母さんも参加して、多世代交流の場になることも。左の写真はメンバーの作品

市村ミツイさん

「健康麻雀」会長の水野多喜男さん。水野さんは、階段の上り下りが困難な居住者の外出を支援する階段昇降機「スカラモービル」の名運転手でもある(左)。「お助け隊」の担当メンバーは毎月1回、練習会を開いて運転技術を磨いている(右)

龍輪槙子さん

イベントは高齢者向けだけでなく、さまざまな世代を対象に行われる。写真は、母親向けの「ベビーマッサージ」(左)と、アートに親しむことで脳を活性化する「脳いきいきアート」(右)

荘司靖子さん

角田文子さん

大島かおりさん

年配の男性、女性が囲み、和やかな雰囲気の中で「飲まない、食べない、賭けない」の健康麻雀を楽しんでいる。

健康麻雀の会長、水野多喜男(みずのたきお)さん(71)は「麻雀は頭も指も使うからボケ防止にいいんだよ。みんな楽しそうでしょ」と笑う。

団地の安全面でも、思わぬ効用があった。健康麻雀のメンバーには自治会の世話役なども多い。ほかの居住者も、そのことを知っているから、困ったことがあると、ここに駆け込んでくる。

「団地内でお年寄りが急に倒れたことがあったときも、発見者が駆け込んできました。ここで集まっていたから車いすを持っていったり、救急車を呼んだりといった対応がすぐできました」(水野さん)

多くのイベントがきっかけとなり、それまで隠れていた居住者の顔がはっきりと見えるようになった。イベントを通じて仲良くなると、それぞれお互いのことを案じるようになる。イベントを休むと、「どうしたの?」と電話がかかってくる。互いに見守り、気遣う空気が生まれていった。

〝ホームナース〟が自宅を訪問

イベントはどれも盛況だったが、それでも中澤さんはまだ顔の見えない要援護者が心配だった。団地内には看護師の資格を持つ住民もいる。そうした人たちの中から協力者を募り、2013年の1～3月の3カ月間、「見守り訪問」を実施した。これは、要援護者の状況確認だけにとどまらず、当初考えていた以上の成果を上げた。

訪問先の、一人暮らしの80代男性宅。男性が語る体調に異変を感じた訪問隊の看護師、龍輪槙子(たつわまきこ)さん(71)は心不全を疑い、男性をすぐに専門医のところに連れて行った。幸い、発見が早かったため、男性は大事に至らずに済んだ。

中澤さんは、「訪問先で『この人は看護師さんですよ』と紹介すると、お年寄りも安心して自分の体のことを話してくれます。病院に付き添って行くときも、医師の言葉を分かりやすく〝通訳〟してくれる。尊敬の念を込めて、〝けやき台のホームナース〟と呼んでいます」と信頼を寄せる。

こうした取り組みは、高齢者支援の側面が目立つが、そればかりではない。高齢者は助けてもらうだけでなく、支援する側にも回る。例えば、若い母親が育児に悩めば相談に乗り、忙しいときには子守りを引き受ける。体力に自信がない高齢者でも、長年培った経験と知恵がある。

「住民同士の支え合い」を形に

それを象徴する取り組みが、2012年6月にスタートした「お助け隊」だ。お助け隊に登録したメンバーが、それぞれの得意とする分野で、ほかの居住者のお手伝いを引き受ける。部屋の掃除、粗大ごみの持ち出し、裁縫仕事、家庭教師、病院への付き添い、階段昇降機を使った外出支援、子守りなど、その中身は幅広い。

近藤富美江(こんどうふみえ)さん(73)は昨年7月、家具の移動と粗大ごみの持ち出しでお助け隊を頼んだ。腰とひざに痛みがあり、ベッドの購入を考えていたが、そのためには、今ある家具の移動と廃棄が必要だった。しかし、自分1人では絶対に無理。「そんなときにお助け隊のチラシを見たんです。早速頼むと、お助け隊の男性3人が来て、あっという間に作業を完了してくれました。3年越しの夢がかないました」と近藤さん。

力仕事が苦手な高齢者にとって、粗大ごみの持ち出しや家具の移動、部屋の掃除はつらい作業だ。逆に、裁縫などは若い世代にとって苦手な分野。お助け隊の本質は、「住民同士の支え合い」にある。

〝孤独死〟の前にある〝孤独生〟

中澤さんは、「自分の役割は居住者の方々の善意をつないだだけ」と語る。しかし、そこには、団地のコミュニティーに対する確固とした信念がある。

「〝孤独死〟の前には必ず〝孤独生〟があります。孤独死をさせないためには、孤独生を放っておかないことです」と中澤さんは説く。

「高齢になっても、身体の自由が利かなくなっても、近くに楽しい空間があって、顔を見せないと心配してくれる仲間がいて、困った時に助け合う仕組みがあれば、誰もが安心して暮らしていけるはず。だからこれからもいろいろな仕掛けを考えていくつもりです」

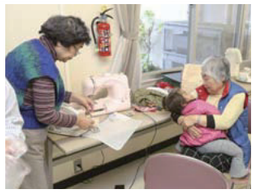
記憶をよみがえらせ、脳を活性化する大人のための作文教室

団地に住む小中学生を対象に、教職経験を持つベテラン講師が勉強を教える「けやき塾」もお助け隊のメニューの1つ。けやき塾で作文や数学などを学習指導する元高校教師で現役作家の八覚正大(はっかくまさひろ)さん(61)が最近、その発展形として新たに開講したのが、「楽文塾」と銘打った大人のための作文教室だ。楽文塾は上手な文章を書くことだけを目的にした、単なる作文教室ではない。講座のキャッチフレーズは「記憶の玉手箱を開く」。若い頃の思い出を文章にし、お互いに批評し合うことで脳を活性化させるのが最大の狙い。「20歳は若返ります」と八覚さん。

第1回目のテーマは、「今まで食べた中で1番美味しかった物」。疎開先での食事、初デートの思い出などが文章になり、語られた。楽しい思い出話に、会場は大いに盛り上がったという。今後も、月に1回のペースで講座を開いていく予定だ。

八覚正大さん

小中学生を対象にした「けやき塾」(上)。授業を教えている間、子どもの面倒を仲間のお助け隊メンバーに見てもらう(下)



顔見知りを増やしていくことは、コミュニティーづくりの基本だ

落ち着いたたたずまいを見せる「けやき台団地」

大倉さん（一番右）と梅澤さん（一番左）は、ボランティアの助けも借りながら、約50人の高齢者の住戸を毎月1回訪問する

超高齢社会に向けて

安心して住み続けることができる住まい・コミュニティーを創造

UR都市機構では、超高齢社会の到来を前に、地方公共団体や民間事業者などと連携しながら、最期まで安心して住み続けることができる住まい・コミュニティーを作り上げるため、多様な取り組みを始めている。その現状と、目指している将来像を紹介する。

★以外の写真＝中村 晃　取材・文＝船木麻里、本誌

PART 1 大谷田一丁目団地（東京・足立区）※1

生活支援アドバイザーが地方公共団体と連携して見守りを実施

「こんにちは～。月イチ訪問です」。東京都足立区の大谷田一丁目団地の廊下に、UR都市機構生活支援アドバイザー、大倉公子さんの明るい声が響く。それに応え、80歳代の柴田正夫さん、葉津子さん夫婦が玄関ドアを開けて、笑顔で迎えた。「ご苦労さま。毎月ありがとう。変わりなく元気にやってますよ」。大倉さんは毎月1回、団地内の高齢者の住居を1軒1軒訪ねて、安否を確認し、近況や健康状態を確認している。

正夫さんは団地で行われたスキーのストックのような専用ポールを使って歩くポールウオーキングの講習会に参加。早速、専用ポールを購入していた。それを玄関で目にした大倉さん。「すごい行動力！」と褒めた。「私は頑張って歩くようにしているけど、女房は足が悪くなってあまり歩けないから、こうして来て声を掛けてくれるのは非常にありがたい」とにこやかに応じた。葉津子さんも「引っ越してきて間もないので知り合いも多くはないの。顔を見に来てくれる方がいると心強いわ」と話した。

見守り電話に加え訪問も

1977年に入居が始まった大谷田一丁目団地の総戸数は1374戸。「現在団地には、60歳以上の高齢者が約1000人暮らしています。そのうちのおよそ4人に1人が一人暮らしです」（自治会長の中島省吾さん）。

高齢者の増加を受けて足立区は2011年、団地内に、「ころつぇシニア相談所」（以下「ころつぇ」）を設置した。〝ころばぬ先の杖〟からのネーミングで、「高齢者が安心して暮らせるように支援する相談窓口」だ。そこには社会福祉の専門家が相談員として常駐している。相談員の梅澤京子さんは保健師だ。

UR都市機構は足立区と連携して、「ころつぇ」の運営に参加協力。生活支援アドバイザーの大倉さんは、「ころつぇ」の梅澤さんとともに相談員も務めている。

生活支援アドバイザーとは、UR都市機構が、高齢者の生活を支援する目的で委託し、現在、全国39団地に配置しているスタッフ。業務は、高齢者が抱える問題をヒアリングし、相談内容に応じて地方公共団体などの適切な福祉窓口につなぐことや、高齢者交流イベントの開催を通じて、地域コミュニティーの形成をサポートすることなどである。

そのほか重要な業務として、登録した高齢者に週1回、電話で安否確認をする「あんしんコール」がある。大谷田一丁目団地でも大倉さんが「あんしんコール」を行っているが、「ころつぇ」と連携することで、月1回、直接顔を合わせる「見守り訪問」も実現した。

「生活支援アドバイザーだけでは、見守り訪問まで手が回りませんでした。『ころつぇ』との連携で顔を見て話す機会ができて、健康状態などがよりはっきりつかめるようになりました」（大倉さん）。

高齢者の交流の場が広がる

大倉さんは、見守りをよりスムーズに行うために、高齢者と触れ合う機会を増やしている。例えば、毎週金曜日の朝、団地内の広場で開催しているラジオ体操。高齢者向きの無理のない約30分の運動だ。当初は数人だった参加者が、今では50人近くに。続々と集まる高齢者を、スポーツウエアに着替え大倉さんはハイタッチで迎える。

「知り合いが増えて、あいさつを交わすようになった」「終わってからお友だちとお茶に行くのが楽しい」と参加者の声。「この場をきっかけにカラオケに行ったり、井戸端会議をしたりと高齢者の交流の輪が広がってきています。うれしいですね」（大倉さん）。

こうした団地内の高齢者同士の交流以外に、大倉さんは自治会や梅澤さんと協力し、高齢者が地域とのつながりも持てるよう、近隣の小学校で小学生と一緒に給食を食べるイベントなどを開催した。

「団地内に生活支援アドバイザーがいて、『ころつぇ』があることで見守りが充実し、さらに地域とのつながりも深まることで高齢者の安心感が増しています」と中島自治会長。

大倉さんは語る。「生活支援アドバイザーだけではとてもここまではできません。今後も自治会や『ころつぇ』と力を合わせて、高齢者が孤立しないような団地にしたいですね」

※1 大谷田一丁目団地：JR常磐線（東京メトロ千代田線直通）「亀有」駅徒歩18分、またはバス3分徒歩1分

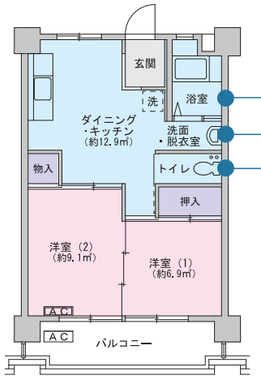
高齢者を孤立させない
〈大谷田の見守り電話・訪問〉

毎週1回、高齢者の安否確認のため「あんしんコール」の電話をかけるのも大倉さんの大切な仕事（上）。「ころつぇ」の相談員の梅澤さん（写真左）と緊密に連携することで、高齢者支援の充実が図られている（下）

10月にポールウオーキングの講習会を開催。先頭は中島自治会長（上）。毎週金曜日の朝は「ころつぇ」の前でラジオ体操のイベントを開催。もちろん、大倉さんも参加して、高齢者との絆を深める（下）

団地全体をケア施設に!
〈奈良北のみまもり住宅〉

◎UR都市機構が高齢者向きの住まいを提供



水回りを中心にリフォーム

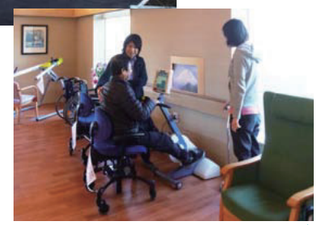
浴室

トイレ

洗面・脱衣室

みまもり住宅は水回りを中心にバリアフリーに配慮した。浴槽は入りやすいように、またぎ高さを低くして、手すりを設置した（上）。洗面所やトイレは車いすでも利用しやすいように、ドアは引き戸や折戸に替えた（左）

◎団地内で介護サービスなどを提供



2013年11月に完成したアビリティーズ・ケアネットが運営する「デイセンターつどい奈良北」（上）。リハビリ、入浴、食事、レクリエーションなど多様なサービスを提供する（右）

◎民間事業者が見守りサービスを提供

●安心お元気コールサービス

●生活相談サービス

みまもり住宅では、民間事業者（アビリティーズ・ケアネット）が見守りサービスを提供する。毎日、電話で安否確認を行い、月1回、生活相談を行う

PART 2
奈良北団地（横浜・青葉区）※2
安心して住み続けるための住まいとサービスを提供する

「ここに引っ越したおかげで、元気に歩けるようになりました」。清水粂博さん（92）は笑顔でこう話す。清水さんは、2013年7月に奈良北団地に越してきた。それ以前はあまり歩けなくなっていた清水さんが回復したのは、団地内に2013年11月に完成した「デイセンターつどい奈良北」に週2日通いリハビリに励んだからだ。

同施設を運営するアビリティーズ・ケアネットの土平俊子執行役員は、「リハビリをやれば清水さんのように歩けるようになる方はたくさんいらっしゃいます」と話す。

「つどい奈良北」のオープンに先駆けて、奈良北団地では、高齢者を対象にした新しいタイプの住戸「高齢者向けみまもり住宅」の入居者募集を昨年、始めた。

「この募集は、高齢者の方に安心していつまでも暮らしていただけるよう『団地全体をケア施設にする』という構想実現に向けた第一歩です」（UR都市機構担当者）

みまもり住宅とは、高齢者が暮らしやすいバリアフリーに配慮した住宅をUR都市機構が用意、それに365日電話による安否確認を行うといったサービスを民間事業者が加える賃貸住宅だ。サービスを提供するアビリティーズ・ケアネットは、リハビリ、入浴、食事の提供などを行う「つどい奈良北」も団地内に設けた。

「みまもり住宅入居者以外の方にも、安否確認サービスを提供します。デイセンターも利用していただきます」と土平さんは話す。

緑に包まれた穏やかな環境の奈良北団地には、もともと診療所があった。そこに、今回、見守りと介護のサービスが加わり、高齢者の皆さんに暮らし慣れた場所で安心して住み続けていただける環境がさらに整いつつある。

※2 奈良北団地：小田急小田原線「玉川学園前」駅徒歩15分、小田急小田原線「鶴川」駅バス13分徒歩1分

セカンドライフを豊かに!
〈豊四季台の生きがい就労〉

将来、あちこちの団地でヤギを飼う?

癒やし効果で高齢者にも好評

東京・町田市の町田山崎団地で2013年9月から行われたヤギによる除草の実証実験。住民に対する癒やし効果も顕著だった。11月末に行われたサヨナライベントには子どもから高齢者まで多くの住民が集まった。「とてもかわいくて、癒やされました。散歩のとき、見るのが楽しみでした」との感想や、「今年だけでなく、ぜひとも毎年飼ってほしい。子どもにとっても、暮らしの中に生き物の姿があるのは非常にいいことだと思います」といった意見が聞かれた。（写真：望月 仁）

団地住民に限らず、柏市民を対象にした就労セミナーを、東大IOGが7回開催。延べ約570人の参加者が集まった

就労セミナー
延べ約570人が参加

保育・子育て・学童保育
約30人が就労

豊四季台団地内にある幼稚園で絵本の読み聞かせを行う高齢者。近隣の幼稚園での就労のほか、小学生や中学生に英語を教える就労も実施している

農業
約50人が就労

団地内に設置された植物栽培ユニット（上）。中では白衣を着て働く。室内作業で、力仕事もあまりないため高齢者でも無理なくできる（左）。柏市内の農地で働く農業就労も行っている（右）

PART 3
豊四季台団地（千葉・柏市）※3
生きがいのために働いて無理なく、楽しく、地域に貢献

千葉県柏市の豊四季台団地の敷地の一角に、2013年4月、高さ2・5m、幅2m、長さ4・5mの大きな箱が2つ設置された。しばらくすると箱の中から、レタスや水菜などの野菜を運び出す高齢者の姿が見られるようになった。

八百屋の倉庫？それにしては働く高齢者の服装が、白衣に白い帽子で、食品工場の従業員のようだ。実はこの箱、屋内で野菜を作る「植物栽培ユニット」なのだ。

柏市、東京大学高齢社会総合研究機構（以下東大IOG）、UR都市機構の3者は、豊四季台団地を舞台に「長寿社会のまちづくり」プロジェクトを進めている。その柱の一つに「生きがい就労の創成」がある。就労のモデル事業の一例として、UR都市機構が敷地を提供し、東大IOGが民間事業者からユニットの寄贈を受け、高齢者が野菜作りに挑んでいる。

「生きがい就労」とは、高齢者が、生活維持のためではなく、セカンドライフを豊かに過ごすために、無理なく、楽しく、地域に貢献する働き方のこと。農業、育児、生活支援、食、福祉の5分野でモデル事業を行っている。

東大IOGが主催した就労セミナーには延べ約570人もの高齢者が集まった。その後、保育園などにおける育児就労、特別養護老人ホームにおける生活支援就労なども行われるようになった。

プロジェクトでは、もう一つの柱として在宅医療の推進にも取り組んでいる。今春にはサービス付き高齢者向け住宅と在宅療養支援診療所などを一体化した施設が完成。地域医療の拠点が動き出す。今後、就労支援や在宅医療を推進して、「地域で活躍しながら、いつまでも在宅で安心して暮らせるまちづくり」を目指す。

※3 豊四季台団地：JR常磐線・東武野田線「柏」駅徒歩13～17分、またはバス5分徒歩1～3分

ワカメ・コンブ漁など漁師歴40年以上という鳥居孝人さん。新しい自宅の窓からは直接、海を眺めることができる

地域の団結力で早期の再生を実現「3年目の正月は自宅で」の願いに応える

住民の多くが漁業を生業とする岩手県釜石市の花露辺地区。
被災からわずか4カ月で地元町内会は自ら復興計画を練り上げ、市に提案した。
市からの要請を受けたUR都市機構は昨年12月、被災者のための復興公営住宅（災害公営住宅）を完成させて、
「3年目の正月は自宅で過ごしたい」という地元の悲願に応えた。

写真＝井上 健　取材・文＝茂木俊輔

花露辺の港を見下ろす新しい自宅の窓際で、鳥居孝人さんは久しぶりの海の光景に目をやる。荒れ具合によっては出漁を取りやめることもあるだけに、「居ながらにして海の様子をうかがえるのはありがたい」と話す。

被災以降の約2年半を集落から車で30分ほど離れた仮設住宅で過ごしてきた。毎朝、軽トラックで港のある花露辺まで一旦出向かないと、漁の可否を見極められない不便さ。そして、ただでさえ手狭な仮設住宅の中で、高価なため外には放置しておけない漁具と暮らす窮屈さ。それらからようやく解放され、被災後3年目の正月を自宅で迎えることができた。

鳥居さんの新居は、UR都市機構が昨年12月、花露辺地区の高台に完成させた「復興公営住宅」だ。鉄筋コンクリート造りの4階建てで総戸数は13戸。漁業集落では初めての復興公営住宅である。

被災4カ月で復興計画を提案

花露辺には約70世帯が暮らし、その9割近くが漁業に従事する。半数近くは高齢者だ。東日本大震災では津波によって、海に近い3分の1近くの家屋が全壊した。鳥居さんも被災者の1人。住宅や作業小屋などの家屋は全て津波に流されてしまった。

しかし、大地震発生時にはまず互いに助け合いながら逃げることを防災の基本に据えてきた花露辺では、当時、集落内に残っていたほとんどの住民が、高台にある、集会施設を持つ漁村センターに避難し、難を逃れた。同じ姓の親族も多く、団結力の強いこの集落では、日ごろからほぼ全ての住民が避難訓練に参加してきた。町内会長の下村恵寿さんは、「日ごろの役割分担に従って避難生活に必要な物資をかき集め、被災当日の夜8時には握り飯を配っていました」と、住民のチームワークの良さを誇る。

被災から4カ月後には、下村会長を中心に、これまで通り防潮堤に頼らない独自の復興計画をまとめ、市に提案した。津波の襲った海抜16mまでの土地を漁業用の作業場として整備するとともに、高台に避難所の機能を備えた被災者向けの本格的な住宅を建てる、という案だ。

正面エントランス脇に設けられた「かけ下げ」で、車体に付着した塩分を洗い落とす（左）。各住戸の玄関脇には、洗った合羽を掛けておける収納スペースも確保されている（右）

花露辺町内会・会長の下村恵寿さん

一方、提案を受けた市は、当時まだ市全域の復旧作業に追われていて、それに対応できる体制が十分に整っていなかった。「そのため、計画実現に向けた業務を、まちづくりの経験が豊富なURにお願いしたのです」と、釜石市復興推進本部復興住宅整備室長の竹澤隆氏はその経緯を語る。

「同じ1年でも重みが違う」

UR都市機構は2012年3月、市からの要請を受けて早速、地元の描いた計画の実現に向けて作業に取り掛かる。地元から強く望まれたのが、花露辺復興住宅を2013年12月までに完成させること。下村さんは「若ければ、もう1年でも待てるが、高齢者ではそうはいかない。同じ1年でも、時間の重みが全く違う。仮設住宅などの避難先で暮らす人たちに、3年目の正月は新しい家で迎えてもらいたかった」とその思いを語る。

通常、公営住宅の建設では設計から施工を終えて完成するまで3年は掛かる。だが、地元の要望に応えるためには、1年9カ月で完成させなければならない。「綱渡りをしているような局面が続きましたが、工事の手順を工夫するなどしてスケジュールの大幅な短縮を図りました」と、UR都市機構岩手局住宅計画チームの太田亘は安堵の表情を浮かべる。

努めたのは早さだけではない。新しい住宅には、高齢者の多い、漁業集落ならではの配慮が施されている。正面のエントランス脇には、海水の塩分にまみれた軽トラックや合羽を洗ったり干したりできる、地元で「かけ下げ」と呼ぶ、屋根付きの水場を設けた。各住戸玄関脇には、洗った合羽を掛けておける収納スペース、そして高齢者への配慮としてベンチと、室内の様子をうかがえる半透明の縦長窓を設けた。

「いずれも、普段の仕事や生活について、何が必要か、住民の方々に一つひとつお話を伺い、設置しました」（UR都市機構釜石復興支援事務所・湯川進）。鳥居さんは、「漁師に必要な漁具をしまう場所も多いし、洗面所やトイレも広い。やっと、落ち着くことができました」と語る。この集落で海と共に生きる新たな決意が湧いてきた。

釜石市におけるUR都市機構の復興まちづくり支援

	地区名	面積
復興市街地整備	片岸	23ha
	鵜住居	60ha
	花露辺	2ha

※面積は事業計画等の面積を表す（小数点以下四捨五入）

	地区名	戸数
復興公営住宅整備	花露辺	13戸
	東部（大町1号）	65戸

※戸数は計画戸数を表す　2014年2月1日時点

高齢者への配慮から、玄関の内と外にベンチを、また住戸内の様子を外からうかがうことができる「見守り」用の窓を設けている

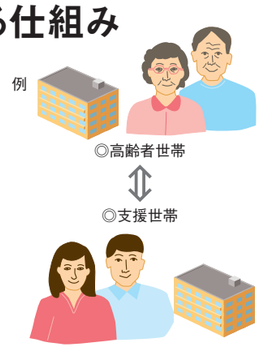
釜石市復興推進本部
復興住宅整備室長
竹澤隆氏

近所に住む家族間で生活をサポートし合える仕組み

UR都市機構では、近年増えている核家族世帯、高齢者の一人暮らし世帯への支援制度として、UR賃貸住宅全体の約76%に当たる約57万戸を対象に「近居促進制度」を実施しています。この制度は、子育てや普段の生活のサポートを家族間で補えるように、子育て・高齢者等世帯と支援する親族世帯の双方が同一駅圏（隣接団地または概ね半径2km以内）のUR賃貸住宅に入居する場合、新たに入居する世帯の家賃を5年間、5%割引するものです。同時に入居した場合は、双方割引を適用します。詳しくは、お近くのUR営業センターにお問い合わせください。

首都圏	Tel:0120-411-363
中　部	Tel:052-968-3100
関　西	Tel:06-6346-3456
九　州	Tel:0120-555-795

http://www.ur-net.go.jp/kanto/kinkyo/gaiyo.html



同一団地内または、同一駅圏（隣接団地または概ね2km以内）で利用可能

UR営業センターに「高齢者相談窓口」を開設

UR都市機構は、高齢者の方にも安心してUR賃貸住宅に入居していただくため、以下3カ所の営業センターに「高齢者相談窓口」を開設しました。

本窓口では、UR賃貸住宅への入居を希望・検討されている高齢者やそのご家族の皆さまが抱える不安を解消していただくため、高齢期の暮らしや福祉制度等について、ケアマネジャー、社会福祉士等介護福祉分野の専門資格を有する相談員がお客さま一人ひとりの状況を踏まえながら、各種情報提供を無料で行っています。

なお、ご相談については事前予約制となっていますので、希望されるお客さまはお電話にてお気軽にお申し込みください。

高齢者相談窓口の様子
（写真は八重洲営業センター）

営業センター	所在地	窓口電話番号	営業時間	高齢者窓口開設時間
八重洲	東京都中央区八重洲1-6-6　八重洲センタービル1階	03-3527-9502	9時30分～19時	火・木・土・日の10時～17時開設 ※12時～13時を除く
新宿	東京都新宿区西新宿6-5-1　新宿アイランドタワー2階	03-5990-5820	9時30分～18時	
梅田	大阪市北区梅田2-2-22　ハービスエントオフィスタワー12階	06-6346-3446	9時30分～19時	

「UR PRESS」Web版もお楽しみください！

内容充実の「UR PRESS」Webサイト。特集の巻頭インタビューや記事のオリジナル動画なども掲載しています。ぜひサイトもご覧ください。

UR PRESS　検索

http://www.ur-net.go.jp/publication/web-urpress/

URのツイッター

UR都市機構のツイッターでは、イベント、キャンペーン、募集情報などをタイムリーに発信しています。ぜひアクセスしてみてください。

http://twitter.com/UR_TOSHIKIKOU/

編集後記

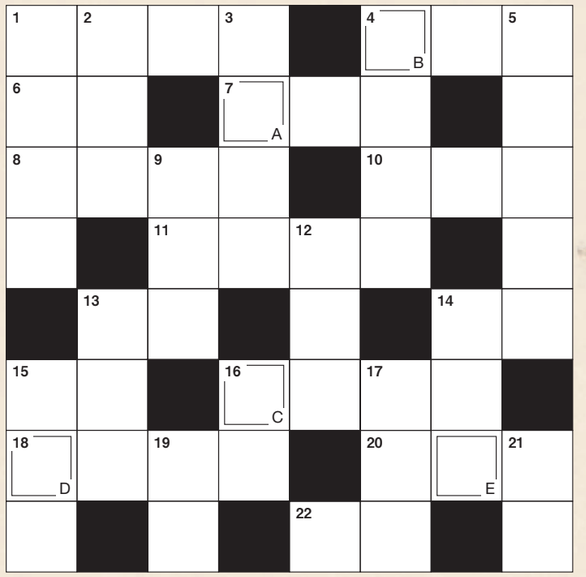
本号は、これまで本誌に寄せられたご要望の中から、超高齢社会に向けたUR都市機構の取り組みをテーマに編集しました。当機構は、大谷田一丁目、奈良北、豊四季台の各団地でご紹介したような取り組みを「Aging in Place」として、団地内だけでなく周辺地域ともつながり、「住み慣れた地域で在宅サービスを受けながら最期まで住み続ける」新たな暮らし方の提案を行い、今後100団地程度を重点的に整備してまいります。

プレゼント付き CROSS WORD PUZZLE

［クロスワードパズル］

クロスワードパズルの解答をアンケートはがきに記入して応募ください。抽選で10名の方に東日本大震災復興支援グッズをプレゼントいたします。

マジックスタジオ＝作



タテのヒント

1 和風エプロン
2 大○○○、○○○焼き、○○○親父
3 陰暦2月の呼び名
4 作った人
5 この式では「仰げば尊し」を歌う
9 2月8日は「針○○○の日」
12 敷布を英語で言うと
13 百花の王とも称される冬も咲く花
14 意見に賛同すること
15 指で押すマッサージ
16 結んでくれる神社は女性に人気
17 尻尾切りで有名な爬虫類（はちゅう）
19 これは急げと言われる
21 ○○より証拠

ヨコのヒント

1 節分にすること
4 植物が生み出してくれる気体
6 樹木はこれを上や横に伸ばして成長
7 ○○○は流々、仕上げをごろうじろ
8 雪で作った洞。秋田県横手市のは有名
10 温かくて薄いのはアウターにひびかない
11 ブルートレインはこれの仲間
13 犬も歩けば当たる
14 3位のメダル
15 昔話でスズメが切られたところ
16 冬を越すこと
18 工事現場はこれが第一
20 使い捨ての暖房グッズ
22 噂をすれば○○

Answer

A	B	C	D	E

Present

釜石市復興支援グッズ「福来旗手（ふくらいき）ぬぐい」抽選で10名様にプレゼント！

*この商品の売り上げの一部は、ラグビーを通じた復興支援活動を行うスクラム釜石、釜石シーウェイブスの活動資金となります。スクラム釜石では、賛助会員を募集中です。
販売：NPO法人スクラム釜石　http://scrumkamaishi.jp/

35号の解答

A	B	C	D	E
タ	ス	ケ	ア	イ

応募要項

UR PRESS vol.36 読者プレゼントへの応募は、本誌付属の応募はがきにクロスワードパズルの解答と必要事項をご記入の上、郵送ください。

応募の締め切りは2014年4月30日（当日消印有効）**です。**

当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

街に、ルネッサンス

UR都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

再生紙を使用しています